

第五回「徳川賞」授与式

去る十一月三日「文化の日」の午後三時より、霞会館において第五回「徳川賞」授与式を行いました。

徳川恒孝理事長の挨拶、速水融選考委員長の選考経過報告並びに講評の後、理事長より著者の高瀬弘一郎氏に賞状並びに副賞百万元（目録）が授与されました。

引き続き高瀬氏による講演が行われた後、第四回「徳川奨励賞」受賞者を指導教授とともに紹介し、各受賞者より自身の研究内容についてそれぞれ披露していただきました。

授与式終了後はレセプションに移り、第三回「徳川賞」受賞作者秀村選三九州大学名誉教授並びに竹内誠選考委員に祝辞をいただきました。服部禮次郎セイコーホールディングス（株）名誉会長・当財団評議員の発声による乾杯が行われ、約二時間にわたり歓談が続きました。

(財)徳川記念財団
第五回徳川賞授与式
平成19年11月3日



高瀬弘一郎氏

なお、高瀬氏は現在慶応義塾大学名誉教授として活躍中です。

第五回「徳川賞」授与にあたって

理事長 徳川恒孝

今年も十一月三日文化の日に「徳川賞」授与式を行いました。多くの関係者と賛助会員の皆様のご参加を頂いて盛会裡に式典と受賞者の講演、続いて和気藹々の祝賀パーティーを行なうことが出来ましたことを本当に嬉しく思います。

「第五回」と言うのは、誠にささやかではありますが、すがいわば最初の区切りではあり、財団設立からの時の流れを今更ながら感じるとともに、この賞を育ててくださった選考委員の五人の先生方の大変なご尽力に心から感謝申し上げる次第です。

この記念すべき第五回目「徳川賞」を高瀬弘一郎先生の『モンスーン文書と日本』という本当に立派なご研究に差し上げることが出来ましたことも嬉しい限りです。このポルトガルのアジアと本国を結ぶ往復公文書に見られるアジアと日本の姿に関する詳細なご研究は今後の日本近世の研究に貴重な視点を与えるものと確信をしています。

「徳川賞」の一つの特徴は、驚くほど豊かで幅広い裾野をもつ日本近世の、その多くの分野を対象として勝れた研究を表彰することにあると思います。最近になって現代の日本の基礎は江戸時代であるという認識が世間一般にも広く浸透し深まって来ていると感じますが、そうであるならばこそ近世の正しい姿の研究は重要であり、「徳川賞」の責任も重いものがあることを強く感じています。

今後皆様のご理解とご支援を心からお願い申し上げます。

(財)徳川記念財団
第五回徳川賞授与式
平成19年11月3日



前列左より 徳川恒孝理事長、高瀬弘一郎氏、速水融選考委員長
後列左より 松尾正人、竹内誠、高聖利彦各選考委員

第五回「徳川賞」選考の過程と結果

選考委員長 速水 融

本年七月二十日の第一回選考委員会において、昨年中に出版された徳川時代を対象とする著書二十二点から、七点を第一次の候補として選んだ。さらに、九月十四日の第二回選考委員会において、まず以下の四点に絞り込んだ。

『近世国家解体過程の研究（前・後）』藤野保、吉川弘文館、『大君外交と「武威」』池内敏、名大出版会、『百姓一揆と義民の研究』保坂智、吉川弘文館、『モンスーン文書と日本』高瀬弘一

郎、八木書店。さらに討議を重ね、受賞される著作は次の著作となった。以下に受賞理由を簡潔に説明する。

『モンソン文書と日本』

—十七世紀ポルトガル公文書集—

高瀬 弘一郎、八木書店

高瀬弘一郎氏のキリシタン時代に関する研究



第四回「徳川奨励賞」受賞者
前列左より 徳川恒孝理事長、小川和也、竹ノ内雅人、友田昌宏、松本剣志郎、三宅秀和、速水融選考委員長（敬称略）
後列 指導教授並びに選考委員

は夙に高く評価されている。今回の受賞作は、基礎史料として在リスボン、国立公文書館所蔵のモンソン文書（ポルトガル国王・インド副王間の公式往復文書）を対象とする研究である。氏は、同文書から日本に関係のある一三四通を取出し、まず訳文の全訳を示し、口語に要約した後、文書が発給された事情・情勢について詳細に調べ、発給による事後の展開まで論ずる。

この文書に関する上記のような一点一点の検討に先立ち、氏は一二三ページに及ぶ「序論」を配し、十六世紀末から十七世紀初期に至る間のポルトガルとアジアの海外領土との関係を述べて居られるが、この「序論」は、「本文篇」（公文書集）の史料のみならず、氏の長年の研究に用いられてきた一次史料によって裏打ちされた研究であって、氏の研究の集大成と考えることが出来る。

十六世紀末、はるかに強大なスペインがアジアへ布教・貿易に乗り出してきたり、さらにそのスペインの無敵艦隊を破ったイギリス・オランダが、より優れた武力・航法・速力を備えた艦船をアジアに進出させ、効率的な貿易を始めると、ポルトガルはたちまち窮地に追い込まれるに至った。

加えてこの時期、日本国内では、秀吉による国内統一、徳川政権の成立、キリスト教禁止への道が引かれ、ポルトガルの推すイエズス会による日本布教、マカオとの間の生糸輸入と銀輸出を主眼とする貿易活動が次第に困難になりつつあった。このこと背景には、ヨーロッパ内部での勢力交替と日本国内の政権交代という二つの歴史の転換が交錯し、旧秩序が崩壊に瀕していたことを挙げなければならない。高瀬氏が、本書に含むモンソン文書を一六〇五〜二一年とされたのも、まさにその時期が、この大きな転換期に相当すると考えられたからである。



日本国内の情勢について、インディア副王から国王宛て一六一九年の文書は、日本の將軍の継承によって、その父親のキリスト教徒に対する迫害が緩和されると期待されたが、却って迫害は激しくなり、殉教者の出たことを伝えている。

このように、これらの書簡は、日本とポルトガルの関係にとどまらず、当時の「世界史」像を物語る証言であり、手稿のマイクロ・フィルムを一コマ一コマ送って探し当てた仕事は前人未踏の偉業である。

高瀬氏は、ポルトガル語・スペイン語・イタリア語・ラテン語に通じ、時には原史料にある間違えも指摘して過去を細部に至るまで描いている。氏の研究は従来の「キリシタン史」の研究の枠を遙かに越えている。

よって本書を本年度「徳川賞」候補として推薦する。